

維新が成って間もない明治4年、新政府は岩倉具視を特命全權大使、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などを副使とする総勢107人の「岩倉使節団」を欧米に派

した。維新政府の要人中の要人が実に1年9カ月をかけて米国、英国、フランス、ドイツ、ロシア、その他全12カ国を訪問し、スエズ運河、インド洋、マラッカ海峡を抜けて帰国した。新政府そのものがユーラシア大陸を長駆一巡したかのごとき壮図であった。

文明を「体得」した岩倉使節団

後に維新三傑といわれた大久保、木戸、西郷隆盛のうち、日本に残ったのは西郷のみであった。西郷の傑出した存在感に期待しての出帆だったのであろう。実際、西郷なくして廃藩置県が成功したとは思えない。西郷は薩摩、長州、土佐3藩の藩兵を解き、これを新政府直属の御親兵として組織、その頂点にいた。西郷は信望と人物の器の大きさを備えた最高権力者であった。政府は西郷に「留守政府」を任せ、西郷もその任に辛うじて耐えた。

「議論の本位」定め大事を論ぜよ

しかし、使節団の派遣はある種の「政治的キャンペーン」であった。使節団の出航は明治4年11月、同年7月に断行された廃藩置県により幕藩体制というアンシャ

ンレームが廃絶され、家禄と地位を失った旧武士は各地で新政府に反抗の刃を研いでいた。この時期、旧武士の新政府に対する憤懣は一触即発の域に達していた。実際、使節団の帰国後、不平士族により、明治7年には佐賀の乱、明治9年には神風連の乱、秋月の乱、明治10年には西南戦争が勃発している。いずれも廃藩置県が誘った既得権益者層による不満の暴発であった。

改めて、なぜ新政府はこのように大きなリスクを賭してなお使節団を派遣したのか。維新が成ったとはいえ、新政府には国づくりの方法論がない。文明国に抗するに

は、文明化に邁進し自ら文明国とならねばならないが、そもそも文

正論



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

明国とはいかなる存在か、文明国の文明国たる所以を指導者自身が「体得」するより他に手段はなかったであろう。

近代化遂行し世界に並ぶ国家に

幕末に強圧的に結ばされた不平等

等条約の撤回を求めることも、使

節団の目的であった。しかし、最

初の訪問国の米国で不平等条約改

正は時期尚早であることに早くも

気づかされる。条約改正には、国内統治をまっとうする法制度の拡

充、生産力と軍事力の増強が不可欠である。欧米列強と対等な文明国にならなければ、条約改正は困難だと悟らされたのである。

大陸横断鉄道、造船所、紡績工場、水道、博物館、図書館、ガス灯、ホテル…総じて産業発展の重要性を悟らされ、さらには共和

力であったといっている。その後の富国強兵・殖産興業政策が、さらには憲法と議会制度が次々とあきれるほどの速さで実現されていたのには、使節団の体得した知恵があったからといって過言ではなからう。明治前半期の富国強兵・殖産興業、すなわち軍事、鉄道、電信、鉱山、造船など近代産業の育成政策の遂行には躊躇というものがなかった。

「事の軽重」を見誤ってはならぬ

福澤諭吉の信念は「西力東漸」の帝国主義時代にあつて日本が亡国を免れるには、文明開化以外に道なし、であった。いかにすれば日本の文明開化は可能か。3度の洋行での知見と数多くの欧米文献を渉猟して執筆された福澤暁生の大作が『文明論の概略』である。第1章が「議論の本位を定る事」であり、その文頭にこうある。

「軽重、長短、善悪、是非等の字は相對したる考より生じたるものなり。軽あらざれば重あるべからず、善あらざれば悪あるべからず。故に軽とは重よりも軽し、善とは悪よりも善しと云ふことにて、此と彼と相對せざれば軽重善悪を論ずべからず。斯の如く相對して重と定り善と定りたるものを議論の本位と名く。…都て事物を詮索するには枝末を払てその本源に遡り、止る所の本位を求めざるべからず。斯の如くすれば議論の簡条は次第に減じてその本位は益確實なるべし」

（わたなべ としお）